

乃木將軍が経験した出會ひ

高山 亨

戦前・戦後を通じ西洋のリンカーン、東洋の乃木といはれる程、傳記出版物の多い乃木將軍の最も一般的な評價は「武士道最後の實踐者」といはれている。

「乃木大將と大和魂」（假題）といふ内容で随想をとの依頼であつたが、その精神的ルーツを述べることが最も相應しいと考へ、表題の如く、乃木將軍の人生最高の出會ひについて簡潔に記してみたい。

その内容については、私が昭和六十年に乃木神社宮司拜命の折、故葦津珍彦氏よりいろいろな話を伺つた中で、「乃木將軍は、日露戦役出征に當つて、乃木家代々の信仰である日蓮宗より神道に改宗された。その動機と内容について、深く考究することが大事だ。」といふひとつの課題をもらひ、その解答（未だ眞の解答は出来ない）を

求めてゐる時、乃木將軍と加藤清正公との深い出會ひがあつたことを知つたものである。

多くの「乃木傳」には、特に崇拜した人物、換言すれば出會ひを求めた人物として、山鹿素行・玉木文之進・吉田松陰・楠正成・加藤清正が共通して擧げられてゐる。これらの人々との出會ひの中から、乃木將軍は、山鹿學こそが眞の學問であり、實學であると考え、乃木將軍の精神の中核を形成したといつて間違ひない。山鹿素行は、その始祖であり、玉木文之進・吉田松陰は、この兵學を繼承した明治維新の偉大な志士である。又、楠正成は、明治維新の志士に共通したシンボルといへる。ところが、残る加藤清正は、すこしばかり異質である。しかし、乃木將軍の生活行動、態度、日常のあり方において一番の

影響を受けた人物、即ち清正公こそが、乃木將軍の眞の「出會ひ」を経験した人物といへる。

乃木將軍は生涯において、二度、清正公の祭典を奉仕してゐる。第一回目は、西南役の翌年、明治十一年一月自らが祭主となり齋行されてゐる。西南役での田原坂の苦戦は、清正公が二百七十年前に設定した陣地戦において戦はれてゐるので、乃木將軍としては、清正公の偉大さを嫌といふ程思ひ知らされてゐる。又、難攻不落の熊本城は、その故にこそ官軍に勝利をもたらしたといへる。

清正公の戦術眼、築城技術への感服、感謝の心は大變なものであつたと思はれるが、しかし、ただそれだけではあれば、谷干城司令官こそ、この祭典を主宰するべきであるし、將軍もこの祭祀をもつて終りとしてしかるべきと思はれる。しかるに、明治四十三年三月十三日、再び清正公の三百年祭を、發起人として乃木伯爵を始め、谷子爵、樺山伯爵、大迫子爵、奥伯爵、清浦子爵、細川侯爵等、又、幹事として三上博士、榊原少將、小笠原大佐等と、錚錚たるメンバーを集め、築地の水交社において盛大に齋行されてゐる。勿論實質的に、かつ熱心に奔走されたのは、當時學習院院長として皇孫殿下(昭和天皇)の御教育にあたり、超多忙の身であつた乃木將軍なのである。

ちなみにその時の齋主を私の祖父高山昇が將軍に依頼されて奉仕してゐるが、この件に關して將軍と祖父との間に交はされた書簡が數通残つてゐる。それを見ると、將軍の熱心さが大變なものであつたことがよくわかる。祖父の祭典式次第に對し、祭典開始時間が何時何分となつてゐるのを、何分を削つて丁度の何時にすべしとか、發起人の列擧のしかたは位階勲等順ではなく、イロハ順にすべきであるとか、細部にいたるまで青鉛筆で加筆訂正してゐる。この訂正も普通は朱筆でする所を青鉛筆でといふ配慮があることも唯々感心するばかりである。これも餘談であるが、祭典當日蓄音機を用意し、發起人の聲を録音してゐる。將軍の「私は乃木希典であります」といふ少々早口の一聲が、今もNHK放送センターと、その部分だけが乃木神社に保存されてゐるが、同時に祖父の聲も残つてゐると聞いたことがある。

さて本題にもどるが、前年明治四十二年三月には清正公は從三位を追贈され、十二月には錦山神社三百年季祭が齋行されてゐる。この式典に、自ら參列し得なかつた乃木將軍は、特に清正公の御番鍛冶である胴田實作の太刀一振りと薙刀一本を獻納してゐる。

又、翌四十四年にはハワイの在留邦人の懇請により、加藤神社が創建されたが、その扁額を贈つてゐる。さら

に清正公名護屋陣内の古材を集めたりもしてゐる。このやうな清正公への傾倒の心情は、どこからきたのであらうか。

水交社での三百年祭にあたり、清正公の傳記出版を企畫した乃木將軍は、井上頼因博士に相談したところ、維新の國學者矢野玄道著の『志基農玖賀陀智』を推薦される。この『志基農玖賀陀智』の中、加藤清正公を抜粹して六百部を自費出版し、關係者に御禮として贈呈してゐる。假名遣ひ、事實の訂正など、井上博士から借りた原本を書き寫し、朱筆で綿密に校訂されたものが乃木神社に所藏されてをり、當初はこれを出版、贈呈しやうとされたやうである。しかし、玄道翁の原作と相當異なることを危惧して、原書のままの出版となつた。

この乃木將軍校訂の『志基農玖賀陀智』を再讀して、初めて將軍の清正公に對する熱烈崇拜の情が理解出來たのである。

すなはち、兩雄の性格、心情、出處進退が極めて似てゐるのである。まさに生き寫しと言つても過言ではない。清正公を鏡として、己が姿を寫してゐたと思はれるほどである。

ここで兩雄の酷似點を多少擧げてみると、先づ第一に大變な政治嫌ひであつたことである。明治の元勳等が品

行の惡さを反省しないばかりか、決して彼等に同化しない乃木將軍等清廉派を忌避し、つひには將軍をして那須への隱棲行動をとらしめたことが二度程ある。増田長盛、石田三成の態度に對する清正公の立場、又、その對應とそつくりである。

又、部下に對する愛情の表現、一途な忠誠心、武勇心、常に戰場にありとの日常の生活態度、ある目的を達する爲のよりよい方法手段を發見する進取の氣風、或は學問宗教に對する眞摯な態度等々こまかく考證するまでもなく、數へあげればきりがなほほど兩雄の人生觀は酷似してゐる。

體制内倫理として完璧ともいへる清正公は、徳川時代を通じて武士道が確立されてゆく中で、武士の鏡と評價されてゆく。山鹿流武士道の實踐的完成者ともいへる乃木將軍。清正公の純忠で誠實な魂は、乃木將軍の琴線に觸れ、共鳴し、人生の師となつたといへる。

(乃木神社宮司)